

27 新資料「美人解剖図」と

「刑死者解体図」

和田 和代史

「蒐集は創造である」の理念の基に、江戸の医学史料館を平成元年に開設した。

江戸時代に初めて人体の解剖が始められた。五臓六腑と言ふ言葉は中国伝来の人体の構成要素を表し、古来わが国では転じて人体そのものの意味に使われて来た。京都において、享保以降古医方の医家による「親試実験」の精神・すなわち実証精神が生まれつつあった。山脇東洋がはじめて官許を得て刑死体の解剖を行い、この際の「解剖図四枚が門人「浅沼佐盈」により描かれ、五年後に『蔵志』として刊行された。古来中国では人の死の後は、九通りの変化の相が現れるという。宋時代の詩人・蘇軾（一〇三六—一一〇一）は「九相詩」に死体を表し、新死相に始まり、死後何日かしてその体が膨れ上がる肪

腸相、皮膚の色が黒ずんでくる青淤相、皮がむけて膿血が流れ出す血塗相、無数の蛆がわく肪乱相、野犬・鳥などに噛み裂かれるたん食相、白骨化した骨連相、骨がばらばらになる骨散相、骨が焼かれて灰や土に帰る成灰相の九相からなる。生前いかに美しい姿をしていようと、死後にはその屍が腐り白骨化し最後には土灰に帰すと説くことで、現世や肉体への執着を戒めた考えである。

新資料として本史料館所蔵の立ち姿の美人画を思わせる「美人解剖図」は三面に額装している。筆者不詳ながら仙台博物館の内山淳一氏は、画風は上方の浮世絵師、たとえば月岡雪鼎（一七一〇—一七八六）やその弟子の岡田玉山らに近く、関西で製作されたと推論している。一面は臓器を描いたもので、毛髪から秀れた浮世絵師の筆のよるものであろう。残りの二面は美女の裸体が徐々にあばかれ、骸骨となっていく様子が描写されている。これはもはや、解剖図に名を借りた「九相詩」そのものの絵画化であり、画家の脳裏には、解剖図の原型としての宗教画が息づいていたのであろう。宗教画の豊富な地・京都を中心に活躍した画家たちの、死体を死体のま

まに描こうとするある種の冷徹な眼差しと、臭いも色もない抽象化された蘭書の銅版挿画を頼りとする新興都市・江戸での解剖図作成。この相違の裏には、歴史的な宗教観の相違が横たわっていると考える。

江戸時代の解剖は、幸いに官許を得ることができて刑体を貰い受けたとしても、所定の場所で一日のうちに終えねばならず、いきおい作業は急を要し、多人数で分担して事にあたらねばならなかった。当時の解剖の経過については、新資料として示す「刑死者解体図」に示されている。作者は不詳であるが、解剖というよりまさに、「腑分け」の絵巻と呼ぶにふさわしい。又、江戸時代の解剖図として内容的に最高のものとされている、淀藩医・南小柿寧一（二七八五—一八二五）が文政二年（一八一九）に描いた「解剖存真図」と、刑死者解体絵巻は資料的には江戸の同時代の和紙に書かれ、京博の狩野氏によると、絵筆は、狩野派の上絵師によるものであると推論されている。武士が、刑死人を駕籠に入れ代官所での刑の執行場面、刑場の描写があり、刀による残首から始まり、刑死者をとりまく画家が参画した解剖描写は、絵かきに

よるものではなく、医者本人により写生されている。それ以前の「蔵志」の如きイラスト的な図とうって変わり、極めて精巧な、完成度の高いにはこれ故であろう。岩絵具も高価なもので、故宗田一先生は、大名クラスのもものが描かせたのであろうと推論された。新資料として新聞に紹介されたとき、順天堂大学の酒井シヅ教授は、「解剖とはこんなに残酷なものであると後世に知らしめる為の資料であろう」と述べられている。今回は、解剖絵図を示し、「腑分け」について考察する。

（和田医学史料館）